

【自由論題セッション】

中国の労働移動問題に関する新たな検討——行動経済学的実験研究

も含めて

王佳星（青山学院大学）

1. 研究背景及び研究目的

中国における労働移動問題を取り扱って研究を行った。1980年代後半から現在にわたって、とりわけ2007年に経済成長のピークに達して経済成長の安定化に向いている中国では過大な労働移動問題（「流動潮」）が深刻化してきている。それと同時に、21世紀に入ってから都市での深刻な出稼ぎ労働供給不足の問題（「用工荒」）も各地域で起きている。本研究は、「流動潮」と「用工荒」の同時発生という「アノマリー現象」に注目し、労働供給側の視点からその裏にある労働移動の意思決定メカニズムを探求していったのである。

中国の労働移動の現状を整理すると、まずは「流動潮」に関して、「戸籍制度」の緩和により、省間地域労働移動は活発化してきているとともに、労働移動は特定の地域への一極集中傾向が見られる。一方、人口流入集中地域であるにもかかわらず、労働供給不足（「用工荒」）が生じていることが見られる。具体的には、人口集中地域の労働力市場では極端な超過需要、人材市場では、逆に極端な超過供給になっているのである。本研究は、このような「流動潮」である地域での「用工荒」の発生を行動経済学的理論で分析することにした。

2. 脳科学的実験研究による仮説検証

中国における労働移動の特徴を整理したうえで、以下の仮説を提示することにした。

- ① 出稼ぎ労働者は都市の規模を考慮して労働移動の意思決定をすること。具体的には、労働移動が主に農村・中小都市・大都市から超大都市・特大都市（超大・特大都市のある省）へ行われていると考えられる。
- ② 大・中・小都市の「用工荒」の発生要因は超大・特大都市の発生要因とは違っていること。具体的には、超大・特大都市においては労働力市場では「用工荒」、人材市場では「流動潮」が生じるという労働市場のミスマッチが発生し、「流動潮」と「民工荒」の並存という現象が起きてしまったと考えるのである。それに対して、大・中・小都市の規模は超大・特大都市より小さいため、仮説①を踏まえると、大・中・小都市では労働移動の流出は続いているが予想される。よって、大・中・小都市の「用工荒」は労働供給不足からもたらされたものであり、その「用工荒」は人材市場と労働力市場の両方で起きていると考えられる。

仮説①を理論的説明のためには、Tversky and Kahneman（1974）が提唱した不確実性下の代表性ヒューリスティクスと利用可能性ヒューリスティクスが有効だと考えられ

る。ここでは、大都市の代表的特性として、大きな人口規模に注目する。大きな人口規模は、周辺地域に対してより多くの情報量の発信を意味するのである。移住の選択に当たって、労働者は人口規模を重視し、利用可能性ヒューリスティックスの影響を受け、代表性ヒューリスティックスの支配下で巨大都市を選ぶことになると考えられる。仮説②の論証にも、前述の理論が当てはまる。ここでの代表性としては、求職者数が考えられる。多くの求職者数は周辺地域の人々に多くの情報量の発信を意味するため、利用可能性が生じる。人材市場のイメージしやすさを求職者数という代表性と関連付けてしまえば、大量な労働供給が就職の成功を代表しているという代表性ヒューリスティックスが生じ、労働者は人材市場に参入することになると考えられる。これらの理論を踏まえて、脳科学的実験を行ったことによって、仮説の適切性が証明されたとともに、労働移動においては利用可能性・代表性ヒューリスティックスが生じること、労働移動の意思決定がそれらのヒューリスティックスに影響されることも明らかになった。

3. 政策的含意

実験研究の結果を踏まえて、超大・特大都市への労働力流入一極集中の緩和、さらに「流動潮」・「用工荒」の並存問題の解決に当たって、政策的情報発信が考えられる。人口規模が大きい（求職者数が多い）ということは、その都市（労働市場）からの情報の発信が多いことを意味しており、情報量が多ければ多いほど、その都市（労働市場）に関する印象と評価がより強く形成されることになると考えられる。代表性である人口規模（求職者数）、いわゆる情報量を重視すれば、ヒューリスティックスが生じ、より多くの人々が超大・特大都市に移住すること、または労働力の人材市場への参入規模の一層の拡大が生じることになるのである。政策的情報発信を通して超大・特大都市への一極集中を抑えた実例として、浙江省があげられる。2012年から「浙商回帰」¹を目指して一連の政策の展開によって、労働力の各都市への分散も促進され、労働力の超大・特大都市への一極集中が一定程度に抑えられた。結果として、2015年城鎮常住人口レベルにおいて浙江省の各都市の人口規模の差は他の超大・特大都市のある省のほど大きくはならなかったのである。

<参考文献>

1. Kahneman, D. and Tversky, A. (1974). Judgment under Uncertainty: Heuristics and Biases. *Science*, 185(4157), pp.1124-1131.
2. 田中啓治編（2008）, 『認識と行動の脳科学（シリーズ脳科学）』甘利俊一監修, 東京大学出版会, pp.208-209.

など

¹ 「浙商回帰」とは、浙江省の経済成長を促すために、浙江省出身の商人の浙江省での創業・イノベーション活動に対して支援していくことである。